第１章

サナア

スーク

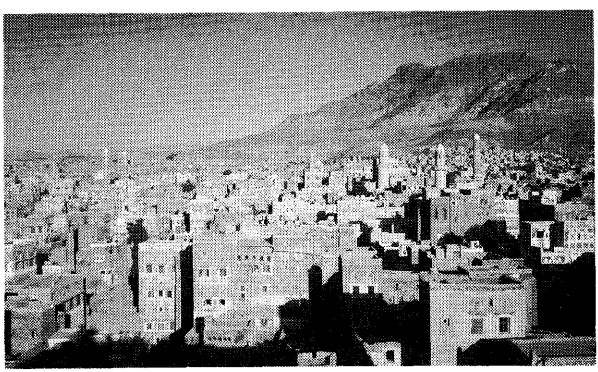
イエメンの首都の名はサナアという。サナアにはいくつものキャッチ・フレーズがある。たとえば「世界最古の摩天楼都市」「生きている博物館」「ミナレット（モスクの尖塔）とハンマーム（公衆浴場）のある町」など。「門をくぐれば、そこは中世アラビアンナイトの世界」というのもいいかもしれない。なにしろ古い町なのだ。日本で大和朝廷ができたころにはすでにサナアは立派な町として知られていた。カイロやバグダードなど知名度の高い他のアラブ都市よりもよっぽど古いのである。単に古いだけならばヨルダンのペトラやシリアのパルミラは紀元前の都市だが、今では遺跡として残っているだけであり生き残った町とは言えない。サナアが「人類が住み続けている最も古い町」というのもあながち誇張ではないのだ。

その古いサナアをサナアたらしめているのはスークである。スークとはアラビア語で市場のこと。バザールという言葉のほうが日本人には馴染が深いけれど、あれはペルシャ語である。サナアのスークは旧市街の真ん中にある。サナア旧市街は、かつて市壁で囲まれていたおよそ一・五キロメートル四方の地区で、スークとそれをとりまく住宅地からなっている。市壁の外に広がっている新市街にもいくつかスークはあるのだが、旧市街のなかのスークは特に〈スーク・アル・メルフ（塩市場）〉と呼ばれ、他の新しいスークとは区別される。この「塩市場」こそサナア発祥の場所であり、二千年以上にわたってこの同じ場所で塩が売られつづけている

のだ。

どうして塩なのか。サナアは海抜二二五〇メートルの岩山に囲まれた盆地にあり、あたりを見回しても塩はない。イエメンで塩が採れるのは紅海沿岸のサリーフという場所で（口絵地図参照）、ここの岩塩は採取量も多く、ひと頃は日本にも輸出されていた。ところでサナアは紅海から約二二〇キロメートル離れた山の中である。今でこそ車で四時間あれば紅海の港町ホデイダにたどり着けるが、かつては険しい岩山を登ってくるのにラクダで四日の行程であった。人間、塩がなくては生きていけない。山岳地に住む人々にとって、塩を入手することはきわめて重要なことであった。

そこで、この山岳地の真ん中にスークができたとき真っ先に求められたのが塩であった。最初に塩市場ができ、その周りにさまざまな生活用品を売る市場が集まってきたのである。サナア旧市街では、アワ、ヒエ、

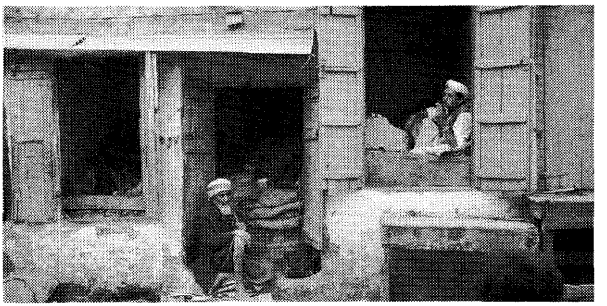


サナア旧市街にひしめく石造りの家並みとミナレット（尖塔）。後方はヌクム山。

キビなどの穀物は塩スークと同じ場所で売られている。塩スークの裏手は香料と薬のスーク、向かいは布スーク、その先に鍋スーク、木工スーク。コーヒー豆、コーヒーの殻〈ギシル〉のスークと、干しブドウ・スークはサナアの名物。忘れてならないのは銀スークにジャンビーア（短剣）スーク。その周りには仕立屋スークに石鍋スーク、最近ではアルミやプラスチック製のバケツ、輸入物の魔法瓶を売る店もある。時計やラジオの修理屋もひと頃はたいそうはやったものだ。

山羊の毛皮のコート屋や、靴屋、秤屋、油屋、炭屋もちらほら残っている。ライフルの弾丸屋は今ではご法度になったが路地の名前だけは残っている。水タバコ用のタバコの葉っぱ、お祝い事のときに花嫁や女の子の顔や手足に模様を書くための染料〈ヘンナ〉（植物の葉を乾燥させたものを粉末にし、水に溶いて模様を書く。粉は皮膚に着くと茶色になって数日間は落ちない）もここに来れば手

サナア旧市街の「塩市場（スーク・アル・メルフ）」。塩以外にもゴマ，トウガラシ，ニンニクなどの香辛料が売られている。



昼下がりのスーク。午前中の仕事を終えてくつろぐカート商人。

に入る。もちろん水タバコ道具のスークもある。ロープ・スークに帽子スークもすみっこのほうに健在。外国人にはあまり用がないけれど、大モスクの周囲の本屋もあなどれない。イエメン人がイスラムの勉強をするにはサナアに来なければ話にならなかったのだ。ここでは暦も売っている。そこここにある小さなレストランとお茶屋は買い物客と商人のため。床屋もある。そして午前中しか開いてないけど、いちばんの混雑をみせるのは午後の社交に欠かせないカートの葉っぱを売るカート・スーク。

とにかく、このスークに売ってない物はない。近代文明が流入しはじめた、今からほんの三十年前まで、イエメン人が生活するための物はこの「スーク・アル・メルフ」に来れば何でも必ず調達できたのである。周りの農村から農具を直しにやってくる農民のために鍛冶屋だってちゃんとある。スークの中心部一帯の建物はほとんどが平屋で、店の間口は幅一間ほどしかなく、道より五〇センチメートルくらい高い床に

主人が一人で座っている。奥行きだって二間もあれば大きいほうで、大人二人が入るとちょっと窮屈という店である。店先には商品が積み上げてあるから、主人は品物を跨いで店に入る。店によっては軒からロープがぶら下がっていて、それにつかまってターザンのように飛び込むのもある。

両側にさまざまな店の並ぶ小路が迷路のように入り組んだこの一画は、ちょっとした異次元世界である。同業者が狭い間口の店を並べて同じようなものを売っている様子、そしてその商人たちが客を呼び込むでもなく、面倒臭そうに、あるいはのんびりと皆同じような格好で座っている様子をながめていると、この人たちのひい爺さんのひい爺さんのそのまたひい爺さんも、ここでこうして同じ格好で同じものを売っていたのだろうな、と思わずにはいられない。スークのおじさんたちは今でも裾がスネまであるワンピースのアラブ服を着て、頭にターバンを巻き、もちろん髭をはやしている。イスラムの預言者ムハンマドが生まれる前にも、またレバノンあたりでイスラム教徒と十字軍が戦っていた頃も、あるいはコロンブスが大西洋を横断した頃も、はたまた黒船がやってきて幕末日本がてんやわんやしていた頃も、やはりこのスークはこの同じ場所で朝になると店を開け、日暮れになると店を閉めることを繰り返していたのだ。スークを歩いていると、ほんのちょっと想像力を働かせるだけで十五世紀のアラビアンナイトの世界にも、十九世紀のオスマントルコの時代にもタイムスリップできる。サナアのスークは

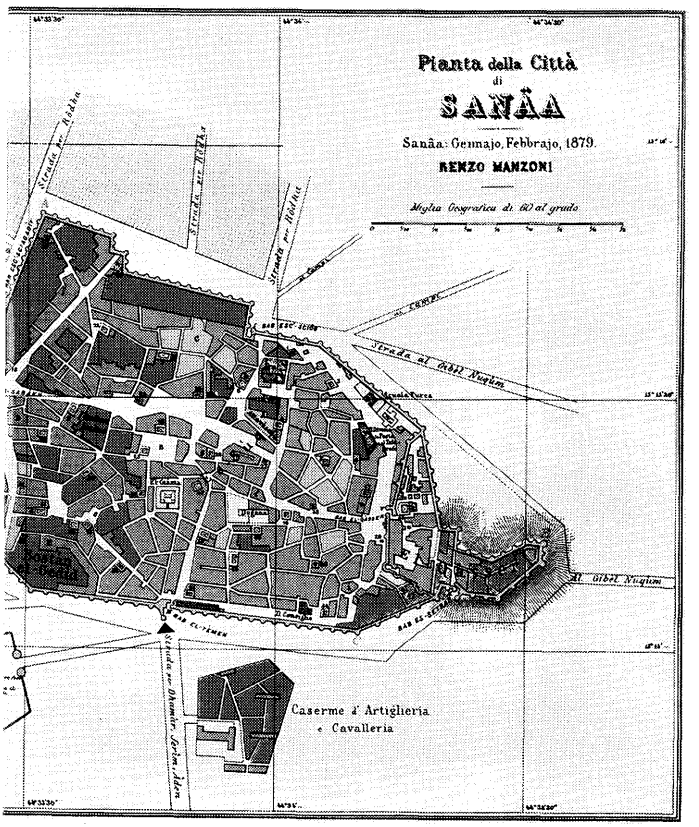
そういう場所である。

市壁　サナアの古さを強調するためにノアの箱船伝説が引き合いに出されることがある。あるとき、神が人間たちの振る舞いに怒って、地上を一回ご破算にするために大洪水を起こした。このとき、神はノアとその家族だけを生き延びさせることとし、同時に地上の動物の一つがいずつに箱船に乗るよう命じた（旧約聖書創世記）というのが、有名なノアの箱船伝説である。定説ではこの箱船が漂着したのはトルコのアララット山だということになっているが、イエメンにはサナアの東にそびえるヌクム山がその山だという説がある。もうすこしひかえめな説では、洪水がおさまった後、ノアの息子のセムがサナア盆地にやってきて、町をひらいたという。この伝説があるのでサナアは「セムの町」〈マディーナット・サーム〉という異名をもつ。

さらに別の伝説によれば、この町はセムの曾曾孫であるカハターンの子のアザルが作ったという。古い時代この町が「アザル」と呼ばれていたのは事実なのである。

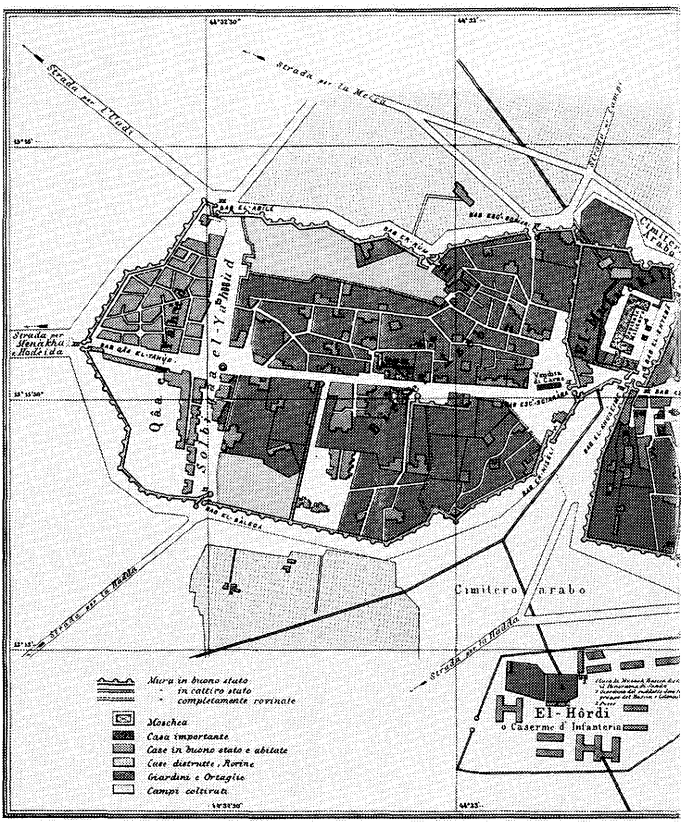
それがいつの頃からか「サナア」と呼ばれるようになり今日にいたっている。「サナア」という名前のいわれには諸説あるが、語源的には「人がなにかを作る」という意味のアラビア語と同じである。そこで一つの解釈は、サナアには昔から鍛冶屋や建具屋などの小工業があったので「物を作る町」という意味だという説。もう一つは、市壁を「作る」ことによって町の防

のサナア



その右上の一角，市壁に囲まれたほぼ中央部分が「スーク」の一画である。

1870年頃



（注）右ページの▲印がイエメン門，その真上の四角いスペースが大モスク，
（出所）*Sana'a*, p. 200.

衛が強固になったので「作られし町」「強められし町」という意味だという説。この市壁を作ったのは紀元二世紀のシバ王国の王シャアル・アウタルだということになっているが、ともかくそれ以後この町の繁栄は市壁により外界から守られて成り立ってきた。なぜ市壁が必要であったのか。

一九九〇年五月までイエメンは北イエメン（イエメン・アラブ共和国）と南イエメン（イエメン人民民主共和国）に分かれていた。北イエメンのなかでもサナアが位置する山岳部地方は、標高二〇〇〇メートルから三〇〇〇メートルの岩がちの山々とその間にある高原盆地とによって構成されている。アラビア半島は部族社会であり、それぞれの部族の自律性が強く、また互いに攻撃的であることで知られている。そのなかでもイエメンの山岳地方は部族主義が政治・社会の基本になっている。山岳民族が、自律心旺盛でかつ好戦的なのは世界共通の現象かもしれない。アフガニスタンをよく知っている人は、イエメンとアフガニスタンの人々はとてもよく似ているという。

通常イエメンの部族民は山のてっぺんに住んでいる。それは戦闘時に敵が攻めて来にくいからである。しかし商業で成り立っているサナアのような町は、山のてっぺんにあったら客がやってこれない。そこでサナアは部族間抗争の激しい山岳地方にあって、人が集まりやすい、つまり攻めてきやすい盆地の中に存在している。

イエメン門。サナアの表玄関である。

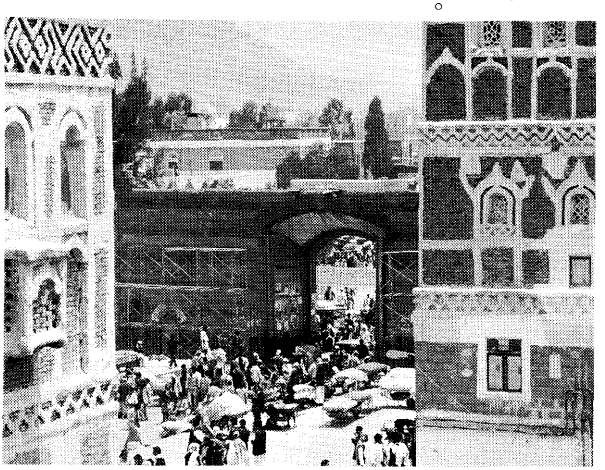
商業の中心地であるからサナアは比較的裕福であり、周囲の部族民にとっては略奪のための格好の標的となりやすい。そこでサナアの人々は防衛策として町をぐるりと頑丈な壁で囲むことにした。

旧市街を取り囲む一周五キロメートルほどの市壁には、門が五つだけあり、それらの門はぶ厚い木の扉でできていた。門は日の出とともに開き、日没とともに閉じられた。ロバの背に荷物を満載してサナアにやってきた商人は、運悪く到着が日暮れ後になってしまったら、盗賊の恐怖にふるえながら門の外で野宿しなければならなかったという。門の両わきには見張り塔があり、兵士が夜通し警備していた。また日干しレンガと粘土で固められた茶色い市壁は高さが一〇メートルほどで、幅はロバの引く車がその上を通れるほどであったという。

さて市壁が活躍するのは敵が襲撃してきたときである。戦闘を好まない都市民であるサナアの人々の戦術は籠城の

一手である。すべての門は固く閉ざされ、人々は何日間でも籠城して、敵が水や食糧の不足で襲撃をあきらめて帰るのをひたすら待つのである。丈夫な市壁が崩れないかぎり敗北はない。もし敵が兵糧責めの戦術をとったらどうなるか。そこに抜かりはない。日々の穀物は家々にふんだんに蓄えてある。肉と乳も家畜から供給される。水は地下水路で周囲の山からサナアまで供給されるシステムができていた。塩は売るほどある。兵糧責めで落城する気遣いはないのだ。

それだけではない。野菜がなければビタミンが不足するというので、旧市街の住宅地には随所にテニスコート二、三面程度の大きさの菜園が散りばめられている。この菜園は〈ブスターン〉と呼ばれ、たいていはモスクに寄進されていて、寺男が大根、ニラ、豆などを栽培してい



内側から見たイエメン門。扉は今では閉じることがない。（撮影・大坪玲子）

る。ブスターンは人の背の高さほどの塀で覆われていて、畑の部分は周囲より一メートルほど低くなっている。またブスターンは旧市街の西側に多いが、これは土地の勾配を利用した地下の下水システムによって各戸から出た汚水、排水がブスターンに流れ込むようになっているからだという。ブスターンに隣接して公衆便所もよく見かける。籠城しても肥やしにも困らず、新鮮な野菜が自給できるというわけである。

まだある。いかに籠城しているからといっても粋な都会の人間はこざっぱりしていなければならない。サナアにはいわゆる「蒸し風呂（ターキッシュ・バス）」スタイルの公衆浴場〈ハンマーム〉が数多くあって、籠城中でも身だしなみは忘れなかったのである。

もちろん長いサナアの歴史のなかでは、門が破られ略奪や放火による大火事に見舞われたことや、攻めてくる敵の優勢を認めて自らおごそかに門を開いたこともあった。しかしサナアが今日までこの国の首都でありつづけてきたのは、やはり堅牢な市壁があったからこそ、である。

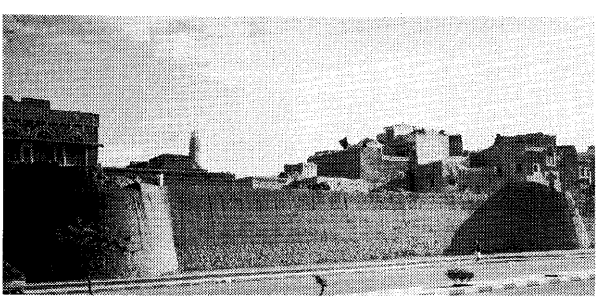
ところがその市壁は現在ほとんど残っていない。門もサナアの正門である「イエメン門」〈バーブ・アル・イエメン〉が残るのみで、あとの門は跡形もない。一九六二年の革命直後に、交通の邪魔になるという理由で取り壊されてしまったのだ。一カ所でも筒抜けになれば市壁の意味はない。したがって残っている部分も手入れされないままに雨風によって崩れるにまかせている。サナアを守ってきた誇り高き市壁にも、もはや昔日の面影はない。近代国家には部族

抗争や略奪などないはずだから、もはや無用の長物というわけである。また唯一残ったイエメン門も今ではけっして閉じることはなく、厚い木の扉は土ぼこりに埋もれている。

これを残念とか、もったいないとか思うのはよそ者の身勝手というものだろう。この忙しい現代に日没と同時に外界との交通を遮断されたのではとても生きてはいけない。とはいえ観光振興を目指しているイエメンにとって市壁は貴重な財産であり、ユネスコによる「サナア旧市街保存計画」の一環として、これを修復して観光資源として活用しようというプロジェクトが始まっている。

かつて、サナアの市壁はよそ者を寄せつけないために築き上げられたのであった。今、市壁はよそ者を引きつけるためのものとして再び築かれようとしている。

家　かつて市壁に囲まれていたサナア旧市街には、一・四平方キロメートル余りの土地に現在約五万人程度の人が住んでいるという。かなりの人口密度である。スーク（市場）が



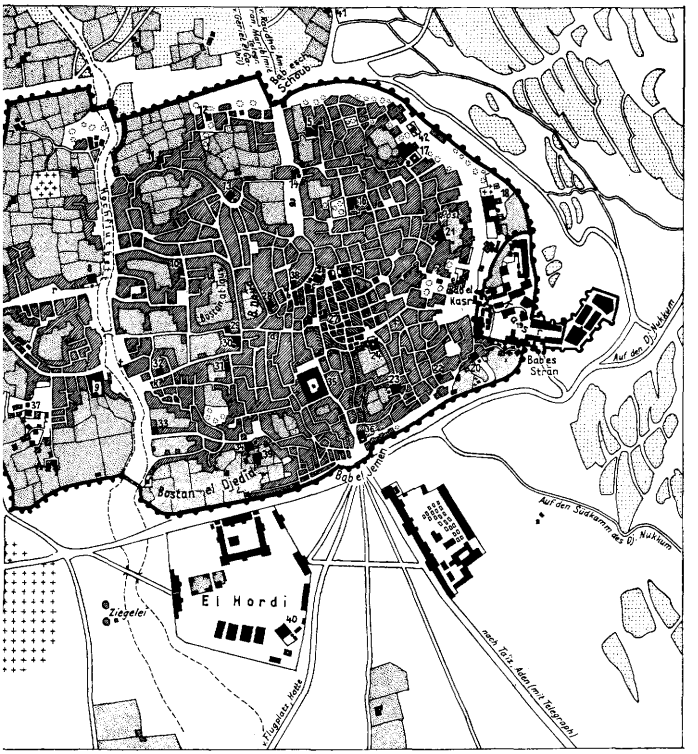
旧市街南側に残っている市壁

繁盛して、人がたくさん流入してくるにつれて人口は増える。ひと頃は一〇万人の人口を擁したともいう話である。人口が増えれば住む家が必要になる。住宅問題はいつでもどこでも行政の悩みの種である。サナア市当局の場合、この町が最初にできたときからつい最近まで、とり得る対策は二つだけであった。一つは市壁を増設して市域を拡張する、もう一つは住宅の高層化である。市壁の外に家を建てるという選択肢は一九六二年九月までなかった。外敵がいつ攻めてくるかわからないから市壁があるのだ、その市壁の外に住むのは自殺行為である。

東側にはヌクム山がそびえているので拡張できないため、市壁の増設は何度か西に向かって行われた。しかし新たに作られる市壁はもともとの旧市街のものよりはどうしてもお粗末になりがちである。なるべくならば頑丈な市壁のあるところに住みたいのが人情。そこで人々は上へ上へと住むようになり、サナアは「世界最古の摩天楼都市」になった。

ところで家を建てるに当たってイエメンで建材として最も手近なのは石である。石ならばそこらの岩山からいくらでも切り出せる。かくして現在「スーク」と並ぶサナア観光の最大のセールスポイントは「石造りの高層建築群」となったのである。スークからはずれて旧市街の住宅街に踏み入ると、石畳のくねくねした狭い小路の両側に五階建て、六階建ての石造りの家々が互いに寄り添うようにそそり立っている。首を真上に向けないと最上階が見えないような七～八階建てのものも珍しくない。一棟の家の幅はせいぜい一〇メートル程度で、建物の形はほ

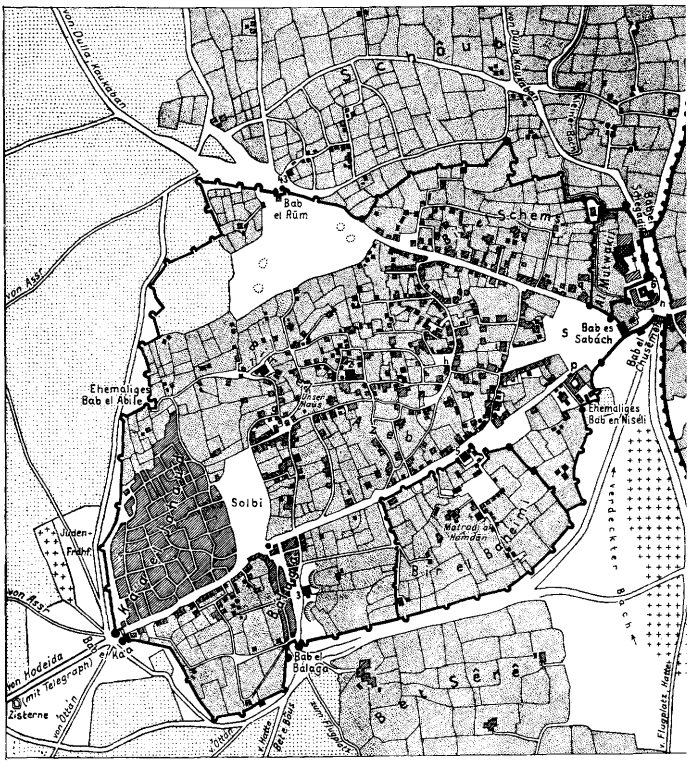
のサナア



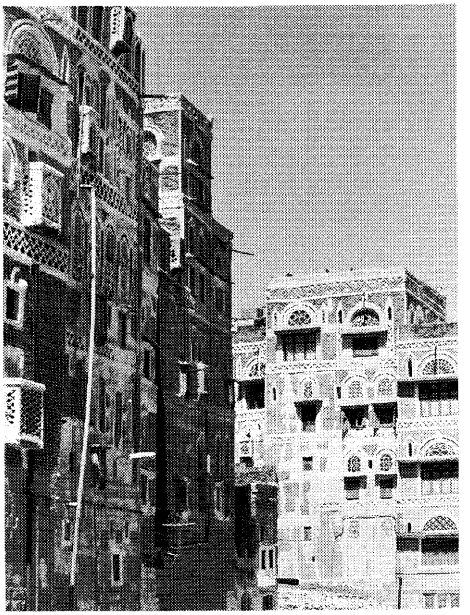
る。図の右半分，住居が密集している部分が元来の「サナア」であり，左半のサナアである。

1929年頃

Maßstab 1:13000



（注）いちばん右に突き出している部分の市壁が最も古い部分といわれてい
分は順次拡張された市域である。これは開国（1962年）以前の鎖国時代
（出所）*Sana'a*, p. 118.



伝統的高層建築。一階部分は入口のみ。二階部分にもほとんど窓がない。上層に行くほど漆喰の模様が細かくなる。

とんど凸凹のない長方形である。

もっとも石造りといっても、いちばん上まですべてが石造りという家は滅多にない。たいていは二階くらいまでの基礎の部分を石で作り、それ以上の階は日干しレンガで壁面を覆い、建物の四隅や窓の周囲、階段などの大切なところだけを石で積み上げるというのが一般的なようである。もちろん外壁のほとんどすべてが石という建物もある。いずれにせよ石は下に積まれているものほど立派である。建物のいちばん下の石などは大きく、がっしりとしていて、長年の風雪（サナアに雪は降らないが）と人通りのせいか表面はつるつるで黒光りさえしている。

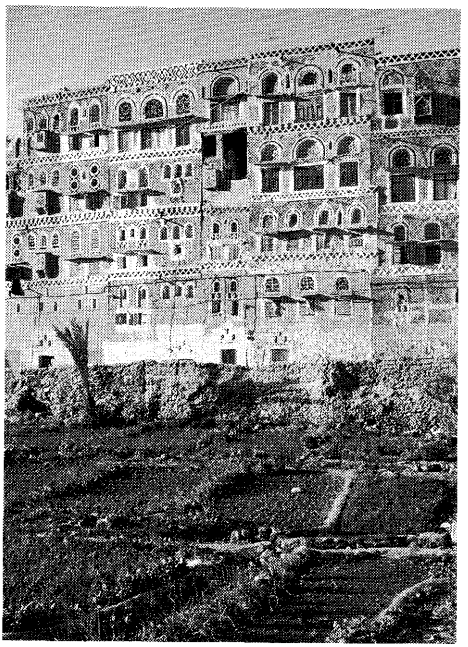
八階建てともなれば地上二五メートルくらいにはなるが、サナアの石工たちは設計図などあてにせず、構造計算や強度計算などというめんどうなこともせずに、鉄骨も鉄筋もない昔から石と日干しレンガと伝統的な技術を駆使してこの高層建築を組み上げてきたのである。木が少ないので建材として使えないことによる生活の知恵であり、地震がないという条件にもめぐまれていたが、小路の両側を隙間なくびっしりと埋めている石造りの家並みの間を歩いてみると、この石積みの技術はただごとではないと思わずにはいられない。

どの家でも通りに面した正面に、それほど大きくはないが厚くて頑丈な木でできた扉がでんと構えている。もっとも最近では鉄の扉も増えているが、どうも重厚さに欠けるきらいがある。

さて、この入口の上部は必ずアーチ状になっている。石積みの建築では壁面にドアや窓のスペースを作るとき、開いた空間の上の石が落ちてこないようにするのが肝心である。このためにアーチ状にして石を斜めに支え合わせる方法がとられる。メガネ橋の原理である。構造上の要請から出たとはいえ、このドアや窓の半円形が、全体として四角い印象が強い石造りの家の外観に絶妙なアクセントを与えてくれる。必要が生み出した美学である。サナアの住民（〈サナアーニー〉と呼ばれる）もこれを心得ていて、窓の周りを白い漆喰で縁どりして、このシルエットをいっそう際立たせてくれる。都会っ子の粋と言うべきであろうか。

ところで、こうした石造りの家一棟の中に何人くらいの人が住んでいるのだろう。ときどき

こうした家から子供たちが歓声をあげながら遊びに駆けだしてくるのに行き当たる。次から次へと、まるで打ち出の小槌でも振るようにさまざまな年格好の子供たちが出てくる。二〇人くらいは朝飯前である。よく見られるのが家長であるおじいさんとその配偶者であるおばあさん、それに息子たちが結婚していればそれぞれの妻と子供たち、という構成で核家族を単位にすると二〜四世帯による三世代複合同居形態である。また、表から見ると一つの扉をもっているが、なかに入ると別々の入口をもち、それぞれが独立に（異なる台所をもって）二家族が住んでいるという場合もある。この場合、二家族のそれぞれが、おじいさんを頂点として二〜四世帯で構成

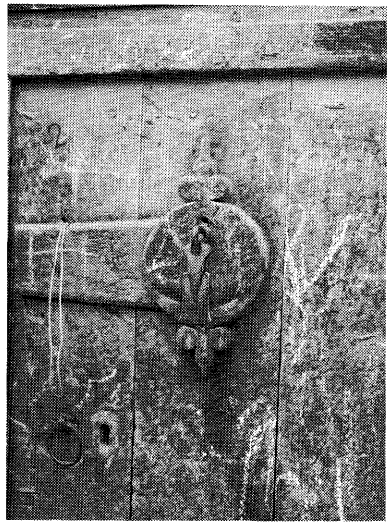


サナア旧市街の住居。手前は
共同菜園（ブスターン）

されるとすれば、一棟に四〇人くらいは生活していることになる。もっとも子だくさんのイエメンではそのほとんどは子供だけれど。

旧市街の由緒正しい家はそれぞれ「〜家の家」〈ベイト・〜〉と呼ばれて、先祖代々住んでいる。なにしろ石でできているから丈夫で長持ちが自慢、築後三百年、四百年という家もざらである。そういう家に住んでいると、四百年前の祖先（と言うと二十代前のじいさんくらいだろうか。日本で言えば信長、秀吉の時代である）がおぎゃあと生まれた同じ部屋でその子孫がきのう産声をあげた、というようなことは当たり前、三百年前のばあさんがパンを焼いた同じ台所で娘が今日もパンを焼く、ということになる。

そんなことを考えながら「サナアっ子」〈サナアーニー〉の顔を見ると、なんだかとってもすごい人たちのような気がしてくる。もっとも彼らのほうでは、日本人をすごい人たちだと思



ドアとノッカー。サナアの家の扉は丈夫さで有名で，部族民による略奪の際には扉も戦利品として持ち去られたという。

っている。なにしろ彼らの乗っている自動車を造ったのが日本人なら、彼らの使っているテレビも冷蔵庫もラジカセもビデオもカメラもみんな日本人が造っているのだから。

家の中　イエメンの石造りの家はたいていどこも同じような内部構造になっている。だから田舎でも町でも使い方は基本的に同じである。ただし、サナアの建物はその使い方が高度に洗練されており、二千年来の生活の知恵の結晶とも言うべき工夫が施されている。

まずびっくりするのは、一階にはけっして人が住まないということ。一階に窓はなく、小さな空気穴が一つ二つ上のほうに開いているだけなので、急に外から入るとわれわれ慣れない者には中の暗さに目が慣れるまでしばらくは身動きができない。ここは家畜のスペースなのである。サナアの普通の家では、たいてい牛を一頭と、山羊・羊を数匹飼っていて、こうした家畜を飼料と一緒に一階に住まわせていたのだ。土地が限られているから高層化したのであり、家畜小屋を別に建てることなどできないし、牛を二階に住まわせるのは難儀だろう。いまでもこうして家畜を飼っている家は多いが、飼うのをやめてしまった家では、ほかに使いようもないのでがらんとしたままになっている場合が多い。

石の大きさの都合で一段一段の高さの違う階段をコの字型に上っていくと二階である。ここにも人は住んでいない。この階は通常天井が低く、窓も石ひとつ分程度の小窓でアーチがなく、通常キビ、アワなどの穀物貯蔵庫として使われる。そのほかにも車の部品だの、テレビの箱だ

のプロパンガスのスペアだのいろいろな物が積み上げられている。納屋が住居と同居していると思えばよい。

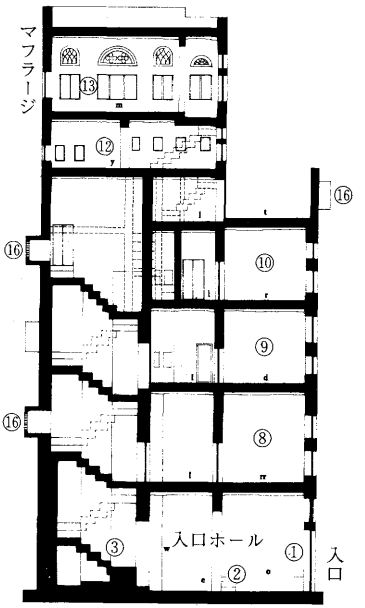
さて三階から上がようやく人間の居住空間になる（間取り図参照）。台所、トイレ以外はすべて居間である。イエメンの人々は居間で食事をし、話をし、勉強をし、そして眠る。ここが食堂でこっちがリビングルームだの、あれが勉強部屋でこちらが寝室などといった区別はない。ただ少し立派な居間とか、少し大きい居間とかがあり、それに応じて使い分けるのみである。ただし男の部屋と女の部屋の区別は明確に決まっている。これは来客があったときに男女を区別するためのものである。ご存知のとおりイスラムでは女性は自分の親兄弟と夫以外の男に素顔を見せてはならない。家族水入らずのときには、みんなそろって男の部屋で団らんすることが多いようだ。女の部屋は育児の部屋でもある。

たいていの部屋には、絨毯とひじ掛けクッションくらいしか家具はなく、がらんとしている。イエメン人は毎日の生活を直接床の上で過ごし、部屋に入るときには靴を脱ぐ。日本人にとってはうれしい習慣である。そして旧市街のほとんどの家には椅子なんて一脚もない。寝るときにはマットレスの上に横になり、毛布にくるまって寝る。マットレスは昼間は座布団代わりになっている。

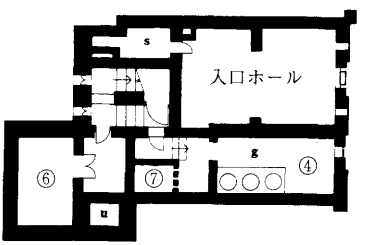
さてもうひとつ特別な部屋がある。それは建物の最上階の、絨毯もひじ掛けクッションもほ

間取り図

〈横から見た断面図〉



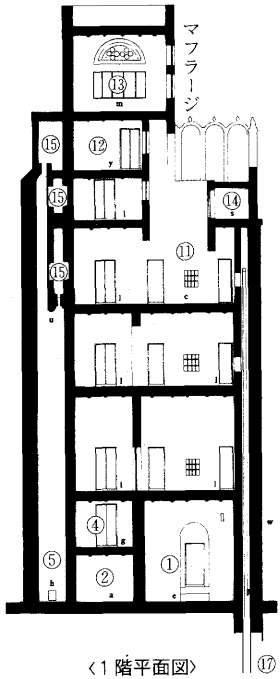
〈2階平面図〉



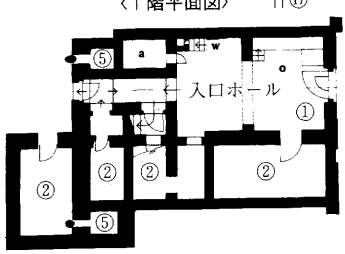
① 入口
② 家畜小屋
③ 階段
④ 粉ひき場
⑤ こえだめ
⑥ 穀物貯蔵室
⑦ 飼料置場
⑧ 3階応接間
⑨ 4階居間
⑩ 5階(寝室にも使用)
⑪ 5階大広間
⑫ 7階女性の部屋
⑬ 8階マフラージ
⑭ 6階物置き
⑮ トイレ
⑯ 出窓
⑰ 井戸
(この家では台所は5階にある)

サナアの住居の

〈正面から見た断面図〉

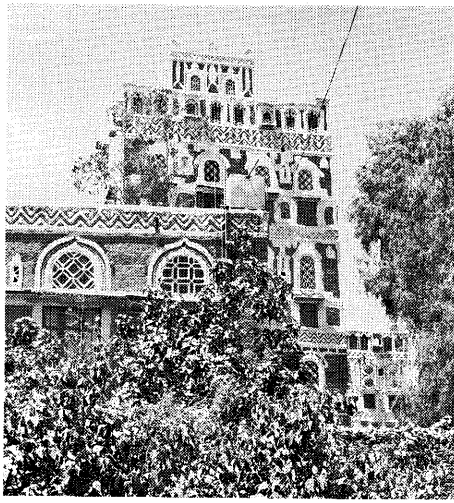


〈1階平面図〉



（出所）*Sana'a*, p. 466.

かの部屋のものより上等で、窓が大きく開いていて眺めの良い、応接間〈マフラージ〉である。この部屋はお客さんがあったときにもてなすための特別の部屋なのである。結婚式があれば、ここで披露宴が開かれる。お祭りのときのカート・パーティーはこの部屋で行われる。この部屋がいかに立派であるかはその家の誇りと格式にかかわる。日本間で言えば座敷である。



建物の最上階がマフラージになっている。屋上の「角飾り」はサナアの建物の特徴である。

マフラージのある最上階は通常下の階よりもやや小さく、その分がベランダのような屋上になっている場合もある（間取り図参照）。屋上は雨による水漏れを防ぐために漆喰で白く覆われており、ぐるりと高さ五〇センチメートル（時にはもっと低い）くらいの手すりがめぐらしてあり、四隅には（場合によってはその間にも等間隔に）角のような突き出しを付けるのがしきたりである。この最上部もやはり白い漆喰で縁ど

りされる。外から見ると建物が平らなかぶとをかぶっているようにも見える。

台所は三階からマフラージの下の階までのどこかにある。ただし火を使うので排煙のために台所の上には部屋が載せられない。したがって下から上までまったくずんどうの家では、台所は最上階にくる。しかしたいていの家は正面から見ると長方形だが、横から見ると階段状になっている場合が多い。それに薪や、調理のための食糧をいちいち最上階まで持って上がるのは大変なので、三階あたりの、表通りと反対の側に台所を造る場合が多いようだ。また女たちが洗濯ものを干したり、ときには豆の選り分けなどの台所仕事をするのも最上階の屋上ではなく、それより下の階段状になった屋上である。表通りから洗濯物が見えないようにするのはエチケットというわけだ。

マフラージの内装（撮影・小平恵一郎）

洗濯は裏庭でする。旧市街のたいていの家には裏手に小さなオープンスペースがあり、昼間は牛が日光浴している。旧家ではここに自家用の井戸をもっている。この裏庭は直接外とはつながっていない。トイレは普通三階以上の各階にある。そして必ず通りに面した側にあり、排泄物のうち液体のほうは建物の外壁を伝わって地面に達し、乾いた地表にあっという間に吸い込まれていく。空気が乾燥しているので無臭である。一方、固形物はストンと一階まで落ちてきて、家畜の糞と合流する。この人畜混合糞はハンマーム（公衆浴場）の燃料として用いられていた。サナアの家の外壁には、通りに面した隅っこの下のほうに小さな掻き出し穴がついていて、この穴の内側に自家製天然燃料がたまる仕組みになっている（間取り図参照）。汲み取り屋（正確には掻き出し屋と言うべきか）が定期的に町中を回り、これを燃料としてハンマーム（公衆浴場）に供給するのだ。薪は炊事用として貴重なのでハンマームには使用しなかったのである。人糞は家畜の糞に比べて、燃やすと高熱になるのでハンマームにはもってこいだといわれている。籠城中でもハンマームが営業できたのはこのシステムがあったからである。さらに燃えかすと灰はブスターン（菜園）に回され、肥料になるのはいうまでもない。衛生問題も同時に解決する、都市の完璧な燃料自給システムである。